韓国歴史散歩
仁川市・富平(プピョン)に砲兵工廠があった(2)

足立　龍枝

現在、元砲兵工廠を使用している米軍基地は２０２２年に平沢（ピョンテク）へ移転し、富平にある米軍基地は返還されると決まっている。しかし、地下水や土壌汚染問題等が起こり、返還の話がスムーズには進んでいないようだ。

返還予定地富栄（プヨン）公園（元砲兵工廠・現米軍基地内）は、広大な敷地で、かなり前から造成工事が続いている。そして、周りの住民たちはスポーツや散歩にすでに公園を利用している。その工事の最中に、防空壕がいくつか見つかったのである。

私は子どもの時、大阪市に隣接した吹田最西部に住んでいた。１９４５年３月１３日に始まり、８月１４日まで続いた「大阪大空襲」の時は国民学校３年生。それ以前から空襲は続いていたので防空壕の思い出は大きい。戦争中の生活の場だったからだ。ひとかけらの黒砂糖につられて、雪の日の夜中も防空壕に入った思い出がある。４月に強制家屋疎開に遭い（大阪市内の親戚が、吹田はまだ安全だろうと、引っ越して来たその日に強制疎開が決まった）我が家は、２ｋｍほど離れたＪＲの北側に引っ越した。

引っ越した家は、吹田という地名にふさわしく水っぽい地域だった。日本で最初のビール工場ができた土地でもあり、泉町という町名があり、氏神は泉殿（いずどの）神社と言って水の神様だった。

訂正させていただきます

292 号 13 ページ삼는➡삼능です。

294 号 21 ページ王女峰➡玉女峰（オンニョボン）

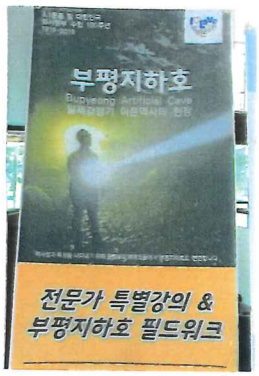
22 ページ国家➡国歌です。

防空壕は、２０センチも掘ると、水が湧き出るところにあった。防空壕の床には、スノコを敷いて、屋根は雪国のカマクラのようにこんもりしていた。現在は湧水も涸れているらしい。

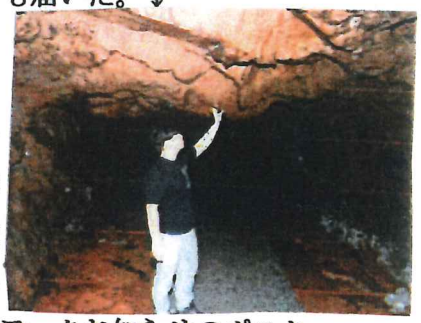
富平で見つかった防空壕というのは素掘り。掘られてから７０年以上も経ち、雑草に覆われ、フェンスで囲まれているので入り口が分からない。

大阪砲兵工廠のように工廠建設と同時進行で掘られたのだろうか。愛知県豊川海軍工廠平和公園に保存されている防空壕は数人用の小型の素掘りだった。３か所の壕が保存されていた。豊川からの手紙によると、工廠ができた時に壕も掘られたと書かれている。富平元砲兵工廠の壕は、研究者の話によると、大阪や豊川と同じように、軍需工場と同時進行だったと考えられるという話だった。

富平は、返還されるまでに、防空壕の問題だけでなく、土壌と地下水を汚染しているダイオキシン類・油類・重金属類等を取り除く問題がある。



この通信の原稿を書いているとき（６月６日）あり得ることだが、驚く連合ニュースが、むくげＭＬで入ってきた。続いて翻訳メールも届いた。↓



↑このポスターは、富平区主催で行われる高校生対象の地下壕についての講座とフィールドワークお知らせのポスター。

富平区の最西端にある低い山に沿って、山の裾に地下壕が掘られていた。軍需物資の保管を目的にしたものだと分かっている。全国各地から強制動員された学生によって掘られたものだ。

仁川、日帝強占期徴用労働者像
＝〈解放の予感〉　　足立　龍枝

レリーフの背面に刻まれていた
彫刻家李ヨンソク氏(51 歳)の言葉より

作品〈解放の予感〉は、日本帝国主義治下、日本陸軍によって建設された南韓（大韓民国）最大規模の（富平公園一帯）兵器廠であった造兵廠を中心に施行された徴用と人権蹂躙、労働搾取、そして、その状況の中で起こった解放を主体に製作された作品である。作品〈解放の予感〉の全体規模は、タテ４ｍ　ヨコ８ｍ　高さ２ｍで床と壁は花崗岩、人物像とレリーフは、青銅で製作された。

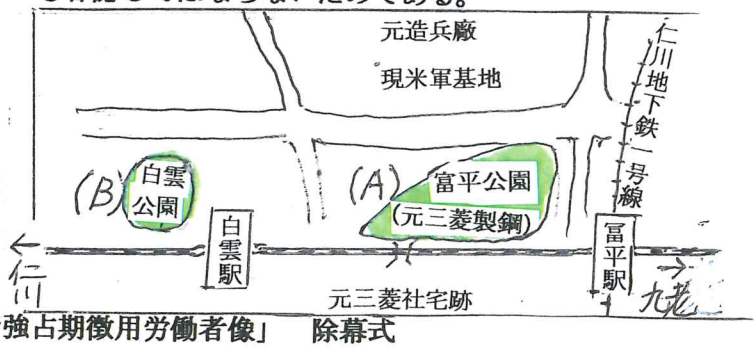
作品の構成で人物像は、当時“造兵廠”を経験された方のうち　チ・ヨンレ（女性　１９２８―　）さんと、イ・ヨンヒョン（男性　１９２１－２００９）さんという実在人物をモデルとしている。

チ・ヨンレさんの日本軍慰安婦強制を避けたために経験した“造兵廠”での労働現場とイ・ヨンヒョンさんの朝鮮独立団活動と、そのため服役される等の活動は、日本帝国主義治下の朝鮮労働者たちの状況を赤裸々に見ていただく重要な事例だと思う。

作品で二人は父娘の配役をする演劇俳優のように、一つの舞台の上で、二人が直接経験した肉体的・心理的状況を表現したりした。１５歳の可愛い娘は、労働現場で経験した人権蹂躙とその経験による情緒的不安・緊張等の感情を表現している。また、アボジは、単純な労働者の雰囲気を残していて、植民地民衆としての自覚と解放に対する念願、子どもたちが支配・被支配のない新しい世界建設に対する意志と予感を表現している。二人の人物のそれぞれ別の視線、そして、台上左の特別な配置は、これからの民族が念願する解放を控えたポイントのその緊張した時間と空間を表している。

後ろ側のレリーフは、二人の人物が経験したことを、一つの物語として伝えることによって、主体の説明的要素を加える。

富平公園は日本帝国主義の暴行が相対的に集約された歴史的空間である。私たちが〈解放の予感〉を通して、これを記憶しなければならない理由は、二度とこの土地に平和を傷つけるどのような行為も容認してはならないためである。



～～～～徴用労働者像設置まで～～～～

２０１７年２月１日　　日帝強占期　徴用労働者像
仁川建立推進委員会発足

・・・・・・・・・・・・・・・

２０１７年８月１２日　　**李ウォンソク作**「日帝強占期徴用労働者像」　除幕式

２０１７年１２１４日　　**李ウォンソク作**「韓何雲（ハナウン）詩碑」完成

(B) 悲しみを詩に表した詩人「韓何雲ハン・ハウン」

足立　龍枝

韓何雲（読み方は、ハナウン）紹介の文章は、先月行われた第３回ペギルジャン白日場（詩の創作コンテスト）のパンフより引用しました。今年の参加者は約１００人だったそうです。

韓何雲（本名　韓泰永ハン・テヨン）は、１９２０年、咸鏡南道咸州で生まれた。

咸興公立普通学校を卒業した後、裡里（イリ）農林学校獣医畜産学科に合格し、更に学業を続けることになった。

何不自由なく暮らしていた彼に、試練が迫ってきたのは、イリ農林学校５学年ごろだった。それは、当時の医学技術では明確な治療方法がなかったハンセン病の確定判定を受けたことだった。

１９４０年、イリ農林学校を卒業した後、病勢が悪化して、故郷に帰って治療に専念するしか他に方法はなかった。

容態が悪くなり、世の中と断絶された生を生きた彼が、詩人として世の中に出て来られたのは、１９４９年、李ビョンチョル詩人の助けを受け、雑誌「新天地」に「全羅道への道」を含んだ１３篇の詩を発表してからだった。同じ年、２５編の詩を収めた「韓何雲詩抄」を世の中に出しつつ、本格的な詩人の道を歩き始めた。

彼は、ハンセン人（ハンセン病回復者➡以下回復者）の福祉のためにも多くの努力をした。自分と同じ処置の必要な回復者のために政府と交渉をして、１９５０年仁川富平に回復者療養所「成蹊園」を設立して自治委員長の席についいてはた。また、イリ農林学校施設専攻を生かして養豚と養鶏技術を取り入れて、回復者たちが社会・経済的に自立することができるようにした。（成蹊園という名称は、韓何雲が東京で学んだ成蹊学園から名付けられた）

<u>ハンセン病に関しては、三宅美千子さんのブログに詳しく書かれています。</u>

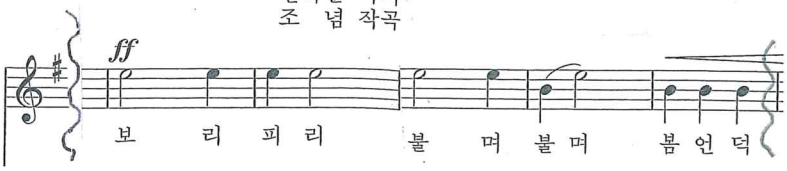
富平に定着した後にも活発な創作活動をして、第２詩集である「麦笛」と自叙伝である「呱々なる生命―私の悲しい半世紀」を発表した。

回復者に対する過酷な社会的偏見に屈することなく、悲しみと挫折を詩で昇華させようとした韓何雲は、１９５９年　完治判定を受けたが、残念ながら１９７５年、富平十井洞の自宅で 55 歳の生を閉じた。富平区は、先年韓何雲詩人の命と文学精神を称えるために、十井洞白雲公園に詩碑を建てた。

麦笛　　韓何雲（金素雲訳）

麦笛　吹き吹き
春の丘
ふるさと恋し
ぴい　ひょろろ
麦笛　吹き吹き
花の山
幼な夢さえ
ぴい　ひょろろ
麦笛　吹き吹き
往き交いの
人の世恋し
ぴい　ひょろろ
さすらう雲の
幾山川
涙の丘越え
ぴい　ひょろろ

한하운 작시
조 념 작곡



韓何雲詩碑のデザインと設置は、彫刻家・李ウォンソクが引き受けたのだが、この作家は、同年８月富平公園に建てられた「強制徴用労働者像」のデザイン作業を進める仕事もした。

このたびの作品では、韓何雲詩人が経験した命の苦痛とともに、彼が築こうとした理想郷の世界、絶え間ない文学の渇望を表現しようとした。